

卒業生・修了生の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。同窓会員の皆様に、2019年度の西洋史学研究室の近況をご報告させていただきます。

2019年度の教員スタッフに関しましては、岡崎敦教授（フランス中世史・アーカイブズ学・資料学）、今井宏昌講師（ドイツ現代史）の二人体制となりました。

岡崎先生は、科学研究費助成の共同研究「資料と公共性」を引き続き運営されており、11月には「パブリック・アーケオロジー」に関する研究会を開催し、演習の授業でも「公共歴史学」に関する文献を講読するなど、精力的に研究を進められています。今井先生もまた、第一世界大戦期の久留米ドイツ人俘虜収容所に関するプロジェクトを進められており、そうした研究を市民に向けて公開する取り組みを進められるなど、大学と社会をつなぐ試みが九大西洋史で本格的に進められていると言えるでしょう。

また非常勤講師として、2019年度は、学内より野々村淑子先生（イギリス教育史）、学外では福岡大学より森丈夫先生（アメリカ史）をお招きし、多様なテーマの演習が開講されました。学部に関しては、2019年度も例年同様に定員いっぱいの10名の進学生を迎えることができました。さらに修士課程には坂本隼人（フランス現代史）、平田哲也（ドイツ現代史）の二人の内部進学生を迎えました。また、9月から学部3年の松口優花さんが「トビタテ！留学JAPAN」の助成を受け、ドイツのハイデルベルク大学に留学しました。

明けて2020年に入ると、COVID-19により、さまざまな行事に影響が及んできました。2020年3月には、ただ一人の卒業生である中山美月さんを送り出しましたが、残念ながら、卒業式、文学部、西洋史学研究室主催の祝賀会は中止となりました。ドイツに留学していた松口さんも、3月に帰国を余儀なくされてしまいましたが、現在は大学院進学へ向けて、卒業論文に取り組んでいます。

2020年4月には、今回も定員いっぱいの10名の進学生を迎えました。残念ながら、授業は遠隔授業となり、大学での対面での交流は禁じられるなど、前代未聞の状況が続いております。このようななかにあっても、院生、特に幹事学年である3年生は、2年生に対して個別担当で配慮するなど、研究室の伝統は維持されています。

このように熱心な学生が増え、九大西洋史は大きな盛り上がりを見せており、伊都キャンパスの研究室が手狭なほどの大所帯となりました。新研究室での生活にも徐々に慣れましたが、やはり大学周辺に商業施設がほとんどなく、交通手段も限られているという不便さがあります。それでも相変わらず、にぎやかな研究室であるように思われます。

キャンパス移転を終えた伊都キャンパスでも学生にとって使いやすい研究室体制を整えるべく様々な取り組みが行われ、研究室の設備面では箱崎時代よりも格段に改善されています。その一つとして、本研究室の卒業生で2017年にご逝去された佐賀大学名誉教授の故前間良爾先生の蔵書を、ご遺族のご厚意によりその一部を九大西洋史学研究室に寄贈していただきました。このコレクションは時代や地域を問わず、日本語で読むことができる西洋史の基本文献のほとんどがそろえられており、目下、学生の勉強に非常に役立っています。こうした蔵書や史料が整然と並べられ、保管されていた様子は前間先生のお人柄が偲ばれるようでした。寄贈していただいたご遺族の方々、また、蔵書の運び出しと配架に協力していただいた学生たちに、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

本研究室主体の学会関係では、4月に、2019年度九州西洋史学会春季大会が、「公共歴史学、公共考古学の射程」という今までに類を見ないテーマの大会となりました。11月には福岡大学で開催された九州西洋史学会秋季大会にて、「近世ヨーロッパにおける国家の統治構造と軍事」と題して、本研究室の卒業生でもある長崎大学の正本忍先生の著書、『フランス

『絶対王政の統治構造再考』の合評会が行われました。また、11月の九州西洋史学会若手部会では、学部3年生の高橋毅さんが「18世紀イギリスにおける「財政軍事国家」と強制徴募」と題した自らの卒論に向けた報告を行い、12月には九州史学会西洋史部会では修士課程院生二人（坂本隼人君、平田哲也君）による報告も行われました。

このように、九州全体の西洋史の発展に貢献するだけでなく、院生による国際学会への参加、海外での研究報告や英語による研究報告を行うなど、積極的に幅広い学問交流を行っております。

以上、簡単ながら今年度の西洋史学研究室の近況をご報告致しました。末筆ながら、卒業生・修了生の皆様のご健勝、ならびに益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

#### 新刊紹介

江里光照『モロッコのリーフ戦争とアブドゥルカリームーワタン防衛のスペイン賄賂とドイツスパイ資金』創英社、二〇一九年

大浜聖香子『12-13世紀におけるポンティウ伯の中規模領邦統治』九州大学出版会、二〇一九年

正本忍『フランス絶対王政の統治構造再考』刀水書房、二〇一九年